

335. 阿須波道・斎王群行にかかわる施設 —北脇遺跡の調査から—

1. はじめに—阿須波道・斎王群行とは—

「斎王群行」とは、未婚の皇女が天皇に代わり斎王として伊勢神宮（天照大神）に奉斎するために都から伊勢斎宮に向かった行列のことで、平安時代には500名以上が随行する華やかなものであったといえます。

仁和2（886）年以降の斎王群行で用いられたのが「阿須波道」と呼ばれる道で、野洲川に沿い鈴鹿峠を越える近世東海道と同様のルートをとるものでした。

阿須波道は仁和2年5月に新道建設の調査が行われ、9月にはこの道を利用して繁子内親王の斎王群行が執り行われています。わずかな期間で、数10kmにおよぶ山道の新設することは難しかったでしょうから、すでに存在していた道を補修したものと考えられています。

この阿須波道は、平安京および西国から、東国とを結ぶ重要な道の一つであり、西国から伊勢に向かうには、最短距離であったことが分かります。

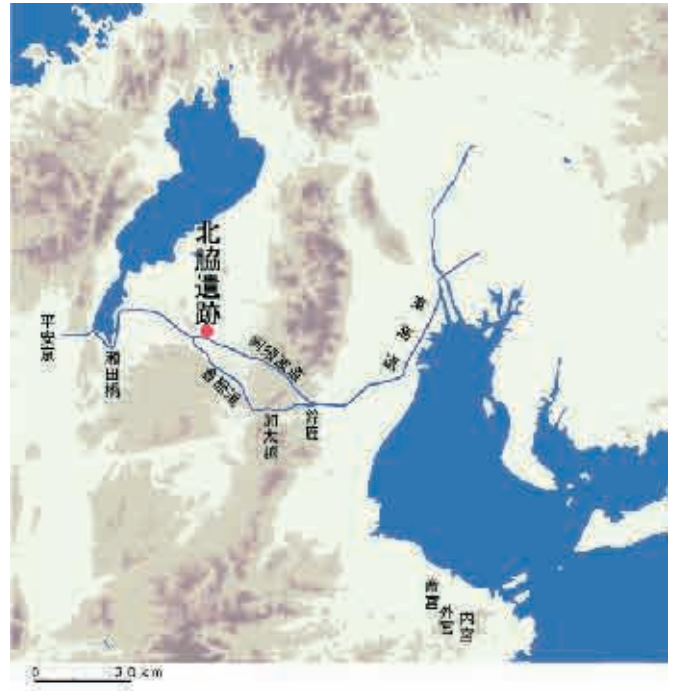


図1 阿須波道と北脇遺跡の位置



図2 北脇遺跡の位置

2. 北脇遺跡をめぐる歴史的環境

北脇遺跡は、滋賀県の南東部、唯一琵琶湖に面していない甲賀市のほぼ中央に位置します。野洲川を渡る横田渡し周辺には、当遺跡をはじめ泉古墳群（古墳時代中期）、大規模倉庫が見つかった植遺跡（古墳時代）などがみられ、発掘調査事例が少ないにもかかわらず、その成果は全国レベルで、目を見張るものがあります。

阿須波道が開かれて以降、文献史料によるとこの周辺に甲賀郡衙、甲賀駅家、甲賀頓宮などが設けられたと考えられます。

3. 北脇遺跡の調査成果

平成18年度に商業施設建設に伴って北脇遺跡の発掘調査を実施し、数多くの成果を得ることができました。

(1) 9世紀後半から展開する遺構群

発掘調査では、6世紀から13世紀にわたる遺構・遺物が見られました。ただし、700年間まんべんなく人が住んでいたのではなく、9世紀後半から10世紀にかけてピークを迎えたことが分りました。

そこで、この時期の遺構・遺物についてみてみることにしましょう。

(2) 50m以上も延びる柵

Ⅱ-1・Ⅱ-2調査区を中心に、東西方向に一直線

に連なる17個の柱穴が見つかりました。これらの柱穴は何らかの施設を囲む柵であると考えられます。この柵はさらに調査区外の東西に延びていきます。柱間は、おおむね3.3m間隔ですから、総延長は約50m（以上）におよぶことがわかります。また、柵の主軸は、他の多くの建物と同様に、北に対して約20度東に振るもので、近世東海道の主軸に類似します。

50m以上にもおよぶ柵が囲んでいたのは、どのような施設だったのでしょうか。普通の集落で見られるものではないことは確かです。

(3) 1×5間の建物

梁間1間（約2m）で桁行5間（約12～13m）という小規模（床面積は約25㎡）で特異な平面形状をした建物が5棟も見つかっています。

斎王頓宮が設けられたことでも知られる近江国庁の東地区において、11世紀のものではありますが、同じ様な形と大きさをした建物が見つかっています。ここでは、建物の周辺から鍛冶炉が見つかったことから、鍛冶工房ではないかと考えられていましたが、鍛冶炉と建物は共存しないことが分かってきました。似通った形と大きさをしたこれらの建物は、どのような役割を担っていたのでしょうか。

(4) 鍛冶工房

調査区の複数の地点から、羽口、鉄滓、砥石といった鍛冶関係の遺物が出土しています。後世に地表が削



写真1 北脇遺跡1-2区全景（国道1号および近世東海道を望む）



写真2 調査区中央の柵



写真3 鍛冶関係の遺物
(左：羽口、中央：鉄滓、右：砥石)



写真4 緑釉陶器関係遺物
(左：須恵器、中央：緑釉陶器、右：緑釉陶器素地)

られてしまったことから、鍛冶炉を見つけることはできませんでした。

大規模な鍛冶作業を行っていたと考えるには鍛冶関係遺物の出土量が少ないことから、臨時的に鍛冶作業を行ったものと考えられます。

(5) 緑釉陶器^{りよくゆうとうき}

10世紀代の食器類としては、近隣で生産された緑釉陶器およびその素地、緑釉陶器とともに生産されていた須恵器や土師器が大半を占めます。

また、隣接地で甲賀市教育委員会が実施した調査では、ゆがみの著しい緑釉陶器素地が出土しています。このことから、近隣の山中で生産された緑釉陶器がここで選別され、流通していったことがうかがわれます。

4. 北脇遺跡の調査成果からみた阿須波道

(1) 甲賀市水口町西部に集中する郡衙・駅家・頓宮
文献史料によると阿須波道が開かれてから後、北脇遺跡の位置する甲賀市水口町西部には、郡衙や駅家、頓宮が設けられていたことがうかがわれます。

今回の発掘調査でみつかった50m以上にもおよぶ柵が囲んでいたものは、一般的な集落ではなく、郡衙や駅家、頓宮もしくは有力氏族の邸宅であったと考えてよいでしょう。

ほかの地域の例を参照すると、これらの施設は地域の主要道に面して設けられていたようです。とすると、阿須波道は北脇遺跡の近くを通っていたことになりま

(2) 斎王頓宮^{ざうしや}の雑舎か？

1間×5間の小規模で特異な構造をした建物は、どのような役割を担っていたのでしょうか。現時点では、北脇遺跡と近江国庁跡で見つっていますが、実は、これらの遺跡は共通点があるのです。いずれもが、斎王群行の頓宮推定地（近江国府頓宮・甲賀頓宮）なのです。もしかすると、これらの建物は斎王群行の雑舎であったかもしれません。

(3) 阿須波道はどこを通っていたのか？

—北脇遺跡の遺構主軸と近世東海道の主軸—

残念ながら、今回の発掘調査において阿須波道自体は発見していません。ただ、幅の狭い水口盆地のこと、南は野洲川から北は北脇遺跡の北側に位置する丘陵までの間、約1kmの間に存在していたことは間違いのないでしょう。

阿須波道の時期と重なる10世紀頃の建物の主軸は、近世東海道の主軸と同様であることがわかりました。

つまり、10世紀頃の阿須波道は、北に対して約33度東に振る甲賀郡統一条里ではなく、近世東海道と同じ様に約20度東に振る主軸で水口盆地を縦断していたことが推測できるのです。

今後、発掘調査成果を蓄積することによって、阿須波道を明らかにすることができるでしょう。

5. おわりに

水口盆地の考古学的調査や研究は、近年ようやく始まったばかりです。今回とりあげた阿須波道と斎王群行は甲賀の地のみならず、日本史の表舞台を彩った出来事でもあります。

今後の調査成果に期待したいものです。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 畑中英二)

この遺跡についての詳細は下記の発掘調査報告書をご覧ください。滋賀県内の図書館などで閲覧することができます。

◆『甲賀市文化財報告書第9集 北脇遺跡発掘調査報告書』甲賀市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、2008年3月刊行。

《参考文献》

畑中英二・木下義信2008「下川原遺跡の再検討」『紀要』第21号、財団法人滋賀県文化財保護協会、2008年。

写真提供：甲賀市教育委員会



写真5 1×5間の建物

(上：I-2区SB6とSB7、下左：I-1区SB1、II-1-8区SB1)